

---

# サイクリング前編

Y-Y

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サイクリング前編

### 【Nコード】

N0052D

### 【作者名】

Y-Y

### 【あらすじ】

中学3年の侑人は、突然クラスメイトに襲われる―最初は隣のクラスの友希弥を自分の物にするためクラスメイトが襲ってきたと思っていた侑人だが…

## 第一話：始まり（前書き）

初めて小説を作りました。よろしければ感想をお願いします。

## 第一話：始まり

上を見れば青空が広がり、後ろを振り向けば小高い山々が連なっている。特に大きなビルなど目立ったものがなく田畑が広がるのどかな町にこの物語の主人公は暮らしていた。彼の名は侑人<sup>ゆうと</sup>。この町の中学校に通う中学3年生だ。

侑人は、勉強の成績は中の上、部活はサイクリング部に所属していた。侑人は野球も好きで、休日は友人と公園で野球をするのが侑人にとって一番楽しいひとときであった。

### 【一】

中学3年生という時期は、誰もが異性に興味を持つ時期だ。それは侑人も例外ではなかった。

侑人は、隣のクラスの友希弥<sup>ゆきみ</sup>が好きだった。友希弥は小学時代からの同級生で今でもクラスは違うが顔を合わせる度に話をしている。侑人は、一年ほど前から友希弥に恋心を抱いていた。

侑人は、どうしたら友希弥の気を惹くことが出来るのか考えた。

侑人は、サイクリング部に所属しているが、部活動というよりは愛好会に近い。大会などの公式戦がなく、部の活動として年に数回サイクリングに行き、普段は部室で世間話をしたり、宿題をしたりするような活動しかない部活なのだ。だから、学校でサイクリング部が脚光を浴びる事は皆無に等しい。むしろ、学校の生徒にサイクリング部に所属していると言うと、

「あのなんもしてない地味な部？」

とか、

「えーサイクリング部？」とか言われて周囲に人がよって来なくなる。部活でダメなら勉強で友希弥の気を惹こうと考えた。しかし、侑人よりも友希弥の方が成績が良い。

勉強でもスポーツでも友希弥にアピール出来ない自分に腹が立つ。侑人はそう思った。

そんな事を思いながら学校の廊下を歩いていると、掲示板にこんな張り紙があった。

「クラス対抗野球大会のお知らせ 出場希望者は担任の先生に申し込むこと。 希望者が多数の場合は選抜を行います。」

侑人は自分でも気付かないうちに職員室に向かって全力疾走していた。

## 第二話：孤独

侑人は息を切らしていた。走って職員室まで来たからだ。息を整えた後、職員室の扉を開け、中に入った。

「失礼しまーす」

そう言っただけに入ると、担任の先生の姿があった。担任の先生の名前は春吉桜子。国語の担当だ。

侑人は大会に参加したいことを先生に告げた。先生は、

「申し込みの締切まで時間があります。それまでに12人以上（3人は補欠）の申し込みがあった場合は選抜になりますよ。それでも良いですね？」

と侑人に言った。侑人は、

「もちろんです。絶対に大会に出ます。」

と言い、職員室を後にした。教室に戻ると、クラスの野球部員が大会（以下クラスマッチと表記）の話をしていた。クラスには野球部員が四人いる。中松、大久保、村多、小村の四人だ。（四人については登場人物についてを参照）四人はクラスマッチに参加させるメンバーは誰が良いか話し合っていた。

中松

「あと8人だな。誰か野球上手そうな奴いるかいな」

小村

「悠琶はどうだ？」

村多

「三木は？」

…という具合に次々と名前が挙がり、あっという間に12人になった。その中に侑人の名前は無かった。侑人はまだ12人全員がクラスマッチに参加することを承諾したわけではないので、まだ選抜しなくても自分はクラスマッチに参加できると思っていた。しかし、12人全員が参加を引き受けたのだ。

ある日の帰り、先生が、

「クラスマッチの選手12人丁度申し込みがありました。私は他に参加を希望する生徒がいなければこのまま名簿を提出しようと思いますが、参加を希望する生徒はいませんか？」侑人は何かがおかしいと思った。侑人は職員室で先生にクラスマッチに参加したいと告げた。そのあと12人が申し込んだ。それなら、参加希望者は13人になるはずなのに、どうして先生は12人丁度と言った？

侑人は手を挙げた。先生はそれに気付き、

「あつそうでしたわ。侑人君も希望者でしたね。そしたら希望者が13人になったので選抜を行います。」  
教室でざわめきが起こる。

「アイツ、野球出来るのか？」

「あの暇潰し部の侑人がねえ。きつと試合で足引つ張るだけだよ。」

あつ選抜で選ばれたらね。ハハハ」

侑人はこのような周りの声よりも先生に忘れられてた事がショックだった。俺は確かに運動は得意じゃない。でも、俺が野球してるとこ見たことあるのは悠琶と三木しかこのクラスにはいない。それでもみんなは俺はスポーツすべてにおいてダメだと思っている。先生にもみんなと同じような気持ちがあつたから、忘れていたのだろう。「選抜は明日の昼休み、高嶋先生のノックを受ける形式で行います。詳しいことは明日説明します。では今日はこれで終わります。さようなら！」

先生はそう言つて教室を後にした。

侑人は明日の選抜に備え、その日は早く寝た。夢の中では侑人が友希弥と一緒に手を繋いで公園を歩いていた。

## EX・登場人物について（前書き）

今更ながら登場人物の紹介です。新しい人物が出てきたら、更新します。

## EX・登場人物について

侑人…この物語の主人公。隣のクラスの友希弥に恋心を抱く。中学3年生。サイクリング部に所属。

友希弥…侑人が恋心を抱く女の子。侑人の隣のクラス。家庭科部に所属。

春吉弥生…侑人の担任。担当は国語。

三木…侑人の親友。陸上部に所属。走り高跳びで全国大会に行くほどの強者。

悠琶…侑人の親友。テニス部に所属。

中松…侑人のクラスメイト。野球部に所属。ポジションは一塁で四番を打つことが多い。

村多…侑人のクラスメイト。野球部に所属。ポジションは左翼または中堅。

大久保…侑人のクラスメイト。野球部に所属。ポジションは三塁。

中松不在の時は四番一塁を務めるが、普段は五番三塁で試合に出場。小村…侑人のクラスメイト。野球部に所属。ポジションは中堅または左翼。チームのリードオフマンを務める。

隈元朋征…侑人のクラスメイト。英語部に所属。侑人と同じく友希弥の事が好き。生徒会副会長で、いつも川野について回る。

川野仁…侑人の学校の生徒会長。真面目な性格で成績もトップクラス。野球研究部に所属。

高嶋先生…侑人の学校の数学の先生。野球部の顧問を務め、三年前

は部を県大会準優勝に導いた。

石握飛堂…地元の札付きのワル。

学3年生。地域のソフトボールチームに所属。伊守先生…侑人の学

校の英語の先生。

地田…侑人のクラスメイト。クラスマッチに参加。

原三…侑人のクラスメイト。クラスマッチに参加。

原敬…侑人のクラスメイト。クラスマッチに参加。  
苺岬…侑人のクラスメイト。クラスマッチに参加。  
大場…侑人のクラスメイト。クラスマッチに参加。  
怪人128面相…様々な人物に変装し、各地で凶悪犯罪を繰り返す。  
なぜか侑人を狙っている。  
棧田逸之輔…侑人の先祖らしいが一体…？

### 第三話：英語（前書き）

第一話でも書きましたが、初小説です。暖かい励まし、お叱り何でも結構ですので評価&amp;感想をお願いします

### 第三話：英語

「ほらっ起きなさい！何時だと思ってるの？」

いつものように侑人は母親に起こされた。

「良い夢だったなあ。一生あんな風に友希弥ちゃんといれたら良いのに……」

そう思いながら侑人は自分の部屋を出た。下に降りると、父親と弟が朝食を食べていた。

「兄ちゃん何寝言言ってたの？『ゆきみちゃん〜一生一緒にいようね』って。なんかのダジャレかよ？それにゆきみって誰？」

弟が聞いた。すると母が

「友希弥ちゃんって小学校から一緒の子だよね？侑人、友希弥ちゃんの事が好きなんですよ？」

と侑人に聞いた。

侑人は顔を真っ赤にしながら、

「そんなことないって！どうせ、葉典の聞き間違いだよ」

そう言つて侑人は食卓を立った。歯を磨き、顔を洗い、制服を着替えてついでに香水を付けて学校に向かった。

学校に着くと、クラス内は英語の時間にある小テストの話で持ちきりだった。

「お前、勉強してきたか」とか、

「あーうち小テストの存在忘れてた！どうしよう」誰もクラスマツチ選抜の話などしていなかった。

しばらくすると、三木が話し掛けてきた。

「侑人くん、今日の小テスト、満点じゃない奴は昼休み再テストするらしいよ。僕達、昼休みクラスマッチの選抜があるよね。満点取れなかったら選抜行けないよ……」

侑人は、

「満点取れなくても先生に選抜あるって言ったら大丈夫じゃないか？」

と言った。すると三木が、

「大丈夫じゃないよーさつき伊守先生が来て、『選抜ある人も今日の昼休みに再テストを行います。選抜に行きたかったら満点を取るのです』って言いに来たもん」

それを聞いて侑人は、

「よし、四時間目の英語まではまだ時間がある。満点獲れるように勉強しよう！」

と言って二人は勉強を始めた。

四時間目がやって来た。始まりのチャイムが鳴ると、伊守先生が、  
「それでは告知していた通り小テストを行います。満点ではない生徒につきましては朝言った通り昼休みに小テストを行います。ええ隈元君、あなた達クラスマツチの選手候補も今日の昼休みに再テストを行います。もっとも、満点取れば話は別ですが。」

そう言うと、先生はテストの紙を配り始めた。

「制限時間は10分。では始め！」

先生の合図で一斉に紙が表に向けられた。侑人はホッとした。朝勉強したところがバッチリ出ていたのだ。

「止め！後ろから答案を集めなさい。今から私が採点をします。その間皆さんはプリントを用意したのでそれを解いておきなさい。」

数分後、再テストの合格者が名前を呼ばれた。

「中松君、大久保君、村多君、小村君……三木君、棧田（さんた）……侑人の名字」君……」

やった！侑人は安心した。三木も合格だ。後は病院に行つて学校に来るという悠琶が来れば……。その時、ガラガラと音がして教室の扉が開いた。

「こんにちは、悠琶君。」

「こんにちは。」

悠琶がやって来た。

「先程皆さんには小テストを受けてもらいました。あなたにも受けてもらいます。」

悠琶も小テストの結果は満点だった。

四時間目が終わり、給食の時間になった。侑人は給食を食べ終えると三木や悠琶と一緒に愛用のグラブを持って校庭へ向かった。普段野球部が使用しているバックネットの前に高嶋先生が立っていた。「みんな集まったか？では選抜を始める」

そう言くと、侑人の手に力が入った。絶対にクラスマッチに出て友希弥ちゃんに良いところ見せてやる…

#### 第四話：選抜（前書き）

登場人物については時々更新するのでこまめにチェックしてくださいね

#### 第四話：選抜

いよいよ選抜がやって来た。高嶋先生が試験の説明を始める。

「えーお前達にはそれぞれ希望するポジション毎にノックを受けてもらう。もしも他のやつとポジションが被った場合は交代で希望するポジションに入ってもらう。その間他の奴は別のポジションを守るというわけ。いろんな場所守れた方が強いぞ。質問は無いか？」

「ありませーん。」

皆が答えた。

「よし、では始める。」

皆はそれぞれ自分が守りたいポジションについた。…と言っても試験を受けるのは13人なので、中松、村多、大久保、小村の四人は抜けた。野球部なので試験は免除されるそう。さつき高嶋先生と春吉先生が話し合って決まった。

それもそうだと侑人は思った。野球部の四人がいなければ試合にならない。だから、残りの8人の棒を9人で争うことになった。

侑人はライトを守りたかったので、ライトの守備位置に就こうとした。すると、隈元朋征がきた。

「おや、だらしのない部の侑人君もライトを希望かい？」

隈元は、生徒副会長だ。いつも生徒会長の川野について回っている。「うん、そうだよ。でも僕は後でライト守るよ。」

そう言つて侑人は隈元に譲り、自分は空いていたセカンドの守備に就いた。ノックが始まった。

一球目は、シュートを守る三木の所に打球が行く。

流石は全国大会に走り高跳びで行った身のこなしでファーストの悠琶に送球する。次は侑人の所に打球が来た。侑人は落ち着いて捕球し、悠琶に送球した。結局全ポジションに一回ずつ打球が飛んでいき、ポジションを交代することなく終わった。「よしよしお疲れさん。では、結果を発表する。」皆が唾を飲んだ。

「…三木、悠琶、地田、大場、原三、苺岬、原敬、… 棧田侑人、… 残念ながら隈元は落選だ。」

よし！侑人は嬉しくて三木や悠琶と喜びあった。

「選ばれたからには頑張れよ！」

野球部の4人も祝福してくれた。こうなったら絶対に活躍して友希弥ちゃんを… 「… 何で俺が… あの侑人の奴め… 俺の友希弥を狙いやがって…」

隈元はかなり悔しがっていた。（友希弥は隈元と付き合っています。念のため。）隈元は一人校庭を後にした。

学校が終わり、侑人はサイクリング部の活動を行っていた。毎年夏に3年生がお別れサイクリングと称して九州を一周するのだ。他に三年間を通してこれと言ってサイクリング部にとって一番の行事だった。

侑人はそれに向けてのトレーニングをしていた。トレーニングが終わり、帰る頃には真っ暗になっていた。侑人は家までの道のりを歩いて帰る。学校から家へと続く道のりの半ばに来た頃、突然後ろから来た男に棒のような物で殴られた！侑人は気を失った。

その時、侑人を殴った男がこう呟いた…

「侑人君、これで君の出番は無くなったね… ハハハ…」

#### 第四話：選抜（後書き）

読んでいただき有り難うございます。感想などを頂けると嬉しいです

## 第五話：倉庫にて（前書き）

書きながら思うのですが、あらずじ通りに話が進むのかナ？なんだ  
か違う方向に話が進んでいるような…

## 第五話：倉庫にて

隈元朋征：侑人の学校の生徒会副会長。生徒会長の川野をあらゆる面からもサポートする。頭も良く、特に英語が優秀で、イギリスで行われた弁論大会に参加し、（勿論英語で発表）見事銅賞を獲るほどの能力がある。…しかし、それは表の顔であった。

今、隈元の目の前には侑人がいた。侑人は頭から血を流していた。「連れていけ」

隈元がそう言うとは何処からともなく男が現れ、侑人を車のトランクに載せ、隈元と共に走り去っていった。

「うーん…」

侑人は目が覚めた。目を開けると、自分が棺のような入れ物に入れられていることに気付いた。しかも、棺は普通とは違った。棺の内側には、底面以外無数の棘に覆われていた。これでは起き上がろうとすると、棘が侑人に刺さってしまう。

「おやおや目が覚めたかな侑人君。」

隈元はいつもの甘ったるい声でそう言うのと、

「ここはどこだ？腐れ副会長。」

と侑人は聞いた。

「おやおや、侑人君の口からこんな言葉が出るなんて意外ですねえ。」

「隈元は明らかに侑人をナメている。隈元はさらに続けた。」

「ここは港の倉庫。助けを呼んでも無駄ですよ。助けが来る前にあなたを殺しますんで。」

確かに、ここから逃げるのは無理だと侑人は思った。しかし何故隈元は自分を殺そうとしているのだろうか？

「何故僕を殺そうとするのかなあ？なんか悪いことした？」

侑人はかなり穏やかな口調で聞いた。

「何ですか？命乞いですか？さつきと態度が違いますね。僕があなたの命を狙う理由。それは、あなたが隣のクラスの友希弥さんのこ

とが好きだからです。友希弥さんは僕の物です。それをあなたのよ  
うな底辺の人間に奪われて堪りますか？あなたの存在が邪魔です。  
だから消えてもらいます。」

こいつイカれてる、と侑人は思った。好きな女の子が一緒だから、  
しかもまだ付き合ってもいない子が奪われたら嫌だと言う理由で人  
をこんな目に遭わせるなんて頭がおかしい。

「言い残すことはありませんか？侑人君。友希弥さんへの愛のメッ  
セージでも構いませんよ。ククク」

隈元は棺の上に重りを乗せ始めた。蓋が潰れば中に入っている侑  
人に棘が刺さって――

「ああ、一つだけ。あんたバカじゃないの？」

侑人はそう言うと、棺の横の面を突き破り外に出てきた。

「実はあんたの長話の時に棺の横の面の棘を抜いておいたのさ。意  
外とチャチな造りだったよ。棘は少し引つ張るだけで抜けるし、棺  
はすぐ壊れるし、隈元君、これってなんかの冗談だったの？こんな  
ショボい棺の中に幼稚園児並みの嫉妬が原因で閉じ込めるなんて笑  
っちゃうね。アハハハ」

隈元は顔を真っ赤にして怒りに震えていた。

「おい、飛堂、あいつ捕まえる！」

隈元がそう言うと、飛堂と呼ばれた男が現れ侑人を追いかけた。両  
手には拳銃とマシンガンを持っている。

「待たんかい！待たんとお前を蜂の巣にしてやる。」それでも侑人  
は逃げ続けた。その時、パァーンと銃声がして、侑人はうつ伏せに  
倒れた。我慢できなくなった飛堂が侑人の背中目掛けて発砲したの  
だ。銃弾は侑人の背中中の左側に当たっていた。

「心臓まで貫通したか……？」

侑人はピクリとも動かなかった。

「どうします？朋征さん」飛堂が聞いた。

「放っておけ。それよりも早く逃げるぞ。」

隈元はそう言つと飛堂と共に走り去つていった。  
「これで友希弥ちゃんが自分の物に…ククク」

## 第五話：倉庫にて（後書き）

今回は襲われて倉庫に連れていかれると言っベタな話でしたね。次回侑人はどうなるのか？次回をお楽しみに！あ、感想&amp;mp;評価も宜しくお願いします。

## 第六話：怪人128面相（前書き）

思いつて物語の構想を変えました。それに伴い、あらすじも変更しました。登場人物の設定は変わらないのでご安心を。今回も物語は急展開を迎えます。いつも突飛な話ばかりで申し訳ありません…  
それでは第六話のはじまりはじまりー

## 第六話：怪人128面相

「棧田さん、棧田さん！」

侑人は気が付くと病院のベッドに寝かされていて看護師に起こされた。

「やっと目が覚めたみたいだね。もう二日も目が覚めないからつきりこのまま…かと思ったよ。」

侑人は声のする方を向いた。そこにはなんと――

隈元がいた。侑人は隈元に飛びかかるうとした。しかし、背中に受けた銃弾の痕が疼き動くことができない。

「…お前…よく平気な面して見舞いに来れるな…殺してやる…」

侑人はベッドの横にあった果物ナイフを掴むと、隈元に投げつけようとした。

「棧田さん！落ち着きなさい！」

看護師が止めに入る。

「こいつは俺を殺そうとした。あの時棘だらけの棺から逃げることでできたからなんとか俺は命をとり止めることが出来たんだ」

侑人が言うと、隈元が、

「は？僕は侑人君を殺そうなんて思ったことも無いし、殺そうとしたこともありません。最も、僕が侑人君と同じで友希弥さんが好きなのは否定しませんがねククク」

「とぼけるな…！」

侑人は再びナイフを握った。

「棧田さん！落ち着いて！」

看護師がまた止める。その時病室のテレビから、こんな声が聞こえてきた。

「…続いてのニュースです。怪人128面相が現れました！怪人128面相は、様々な人物になりすまし、各地で強盗、放火、殺人など凶悪犯罪を引き起こしている凶悪犯です。もし、あなたの家族、

友人の様子がおかしいと思ったら、警察にご連絡を。また、番組にも情報をお寄せ下さい。電話番号は…」

「怪人128面相だつて!？」

侑人は驚きを隠せなかった。もしも怪人128面相が実在したならば、侑人を襲ったのは隈元ではなくて隈元に変装した怪人128面相だという可能性もある。

「ほらね、侑人君を襲ったのはきっと僕に変装した怪人128面相ですよククク」

「そうとは限らないだろう。お前は俺に恨みを持っていた。それだけで俺を殺す動機にはなるだろう…」

侑人がそう言った時、テレビのコメンテーターが信じられないことを言った。

「確かに怪人128面相はいますよ。例えば中学生に変装してクラスメイトを殺そうとしたり…その時は失敗しましたがね。あの日は私の人生で最も最悪な日と言っても過言ではないでしょう。あの棧田逸之輔の子孫、棧田侑人を逃したのだから」

「津田さん、どうかしました?まるでご自分が怪人128面相みたいなことをおっしゃっていますが」

アナウンサーはコメンテーターの正体に気付いたようで声が震えていた。

「そうです。私は怪人128面相です。ニュースに出演するのは始めてなんで緊張しましたよ。あ、出演料はいりませんよ。では今から向かわないといけない所があるのでさようなら」

そう言うとき怪人128面相は、コメンテーター・津田の服装ではなく、2メートルはあろうかというマントを身にまとっていた。そのマントをひるがえすと怪人128面相は消えていた。

「これってミステリー小説でよくあるパターン?」

隈元が言った。

「棧田逸之輔って一体…それに俺が逸之輔の子孫ってどういう事…?」

侑人にはわからないことが多すぎた。

「隈元、悪かった。疑ったりして。これからは怪人128面相のことを調べたり、戦わないといけないかもしれない。友希弥ちゃんのこととは抜きで協力してくれないか？」

「もちろん。人に協力するのも副会長の役目なので」そのあと、隈元は帰った。しばらくしてトントンと扉を叩く音がした。

「どうぞー」

侑人は答えた。きっと看護師かなんかだろう。

しかし、そこに立っていたのは友希弥だった。

「大丈夫？ 撃たれて意識が無いって聞いたから心配したんだよ！」

侑人は友希弥の声を聞くと、背中の痛みなど吹き飛んでしまい、怪人128面相のことも頭から吹き飛んだ。侑人は目の前にいる友希弥のことしか頭に無かった。

## 第六話：怪人128面相（後書き）

一気にファンタジー&ミステリーっぽくなりましたね。新しい登場人物の怪人128面相とは？侑人の先祖だという棧田逸之輔とは？それと、友希弥の会話シーンがやつと出てきましたね。友希弥ファンの方、お待たせしました（いるのか？）次回もお楽しみに！

## 第七話：兄弟（前書き）

お久しぶりです。侑人です！…じゃなくてY-Yです！！テスト、テスト続きで更新出来ませんでした。今回は侑人が隈元朋征に襲われる前の朋征と飛堂のやり取りの話です。

## 第七話：兄弟

2日前の朝、隈元朋征は自宅で朝食をとっていた。すると、朋征の携帯が鳴った。

「兄ちゃんからだ。」

朋征は兄と二人兄弟だった。

兄の名前は輝一<sup>てるかず</sup>。輝一は自らを怪人128面相と名乗っていた。輝一は色々な人に変装して各地で殺人や強盗を繰り返していた。朋征は勿論輝一のその様な行為に反対していた。しかし、今では輝一にとって朋征は欠かせない協力者となっている。輝一は朋征に催眠術をかけていたのだ。朋征はその事に気付いていなかった。

「今日侑人を殺れ」

兄からのメールにはそう書いてあった。

朋征にとって輝一の命令は絶対だった。催眠術の効果で朋征は輝一の命令がおかしいとか、従いたくないとか思わなかった。ただただ命令に従うだけだった。

「分かりました。今夜実行に移します。」

朋征はそう携帯に打ち込み輝一にメールを返信した。

「さてどうするか…」

朋征は考えた。上手く人目につかないところで侑人を襲わなければならない。

「さてどうするか…」

もう一度朋征は呟いた。そのとき、あることを思い出した。

「そうだ。アイツに協力してもらおう…」

朋征は電話を手に取り、番号を押した。

「もしもし？こちらは飛堂。お前は誰だ？えっ朋征さん？これは失礼しました！すんません！申し訳ありません！心からお詫び…」  
こんな調子で飛堂は延々と謝り続けた。

「まあまあ、今日はお前に頼みがある。実は兄さんに頼まれたことがあってな…」

朋征は飛堂に輝一に頼まれた事を説明した。

「そうですか…それなら学校帰りに後ろからそつと襲うのが良いと思いますけどうでしょうかね殺せというのは…やりすぎじゃないですか…」

飛堂は地元でも有名な不良だが、かなり丁寧な口調で（朋征に対しては）とてもまともなことを（たまに）言う。この時も、飛堂は脩人を殺してしまうことには反対だった。

「兄さんが言うことは絶対だ。協力出来ないのなら縁を切る」

朋征が言うと、飛堂は、

「分かりましたよ…ちゃんと協力しますつて！」

「僕が脩人を学校帰りに襲う。お前は倒れた脩人を倉庫へ連れていけ。そこでじつくりと苦しませて殺してやる…ククク」

朋征は飛堂に指示をした。

「了解しました。ではまた後で合流しましょう」

電話を切ったあと、朋征は準備に取り掛かった。

「脩人…かわいそうにお前は今日で終わりだ…この僕の手にかかってな…ククク」

その日の夕方、朋征と飛堂は脩人の通学路に潜んでいた。しばらくすると脩人がこちらに向かって歩いてきた。

「行ってくる」

朋征は隠れていた茂みを抜け出した。

「頑張つて下さいよ。失敗しちゃあダメですよ？」

飛堂は後ろから声をかけた。

## 第七話：兄弟（後書き）

確認ですが、今回の最後の部分は、第四話の最後に続きます。隈元兄弟には隠された秘密が…？次回もお楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0052d/>

---

サイクリング前編

2010年11月15日07時25分発行